

「伯家神道」^{はつけしんどう}継承者・七沢賢治さんに教わる和の真髄

古神道で迎える 新年のお作法入門

日本の叡智・古神道に興味を持つ方たちから
絶大な支持を得る、伯家神道を受け継ぐ七沢賢治さん。
本誌でも人気の言霊の力を駆使したハイテクツール
「ロゴストロンシリーズ」の開発者として科学者の側面も併せ持つ、
穏やかで柔らかな達観されたお人柄は、まさに
この国に古くから根付く和の世界観を体現していらつしやいます。
新たな年への切り替えというタイミングで
古神道の見地から和の真髄を語っていただくとともに
伯家神道に受け継がれる正月飾りと神事のお作法を、
誌上初公開していただきました。

お話し◎七沢賢治さん 取材協力◎七沢研究所 取材・文・構成◎ユカワマユミ 撮影◎桐生夏希

和に秘められた新時代を拓く鍵

「和」と「大和魂」の本来の意味

日本語は、かつて「和語」と言われ、
今から千数百年前の奈良時代以前では
「上代語」とされていました。

その中で、「和」をこのように解釈

していました。

聖徳太子が制定した17条の憲法の第

一条は、「和を以て貴しとなす」と
書かれています。でも、当時は和を「わ」
と読まなかったんです。

「やわらぎ」、あるいは「にぎ」と言っ

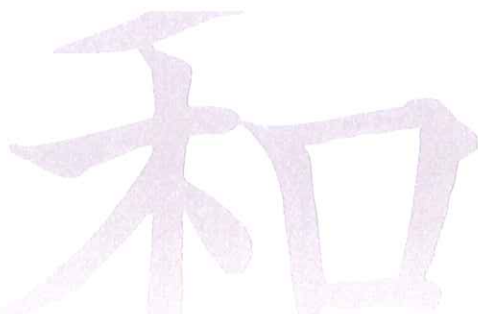
ていました。「やわらぎ」というと、
優しそうで柔軟性のあるイメージが非
常によく伝わってきますね。憲法の一
番最初に「やわらぎを以て貴しとなす」と掲げられたことから、こう
いうことが見えてきます。

まず、昔の人たちは「和」というも
のを、「人間関係」や「国家と人」とい
う立場から見ても、「一番心地良い大

事なもの」とみなしていたんです。そ
れが本来、日本人にとっての「大和」
という意味です。「大きく和する国に
しよう」という想いで、大和としました。
「和」という言葉は「大和」になり、そ
こから「倭（やまと）」という言葉が当
てられました。倭とは「静けさの中で
和らいだ気持ちになる」という意味が
込められています。



ななさわけんじ◎言語エネルギー発生装置ウイン
ト・エッセンス・システム、ロゴストロンシステム開発
者。知識の模式化（ナレッジモデリング）を土台と
した情報処理システムの開発者。白川伯王家に
古代から伝えられてきた宮中祭祀の伝承者。株式
会社七沢研究所代表取締役社長、株式会社ロ
ゴストロン研究所代表取締役会長、一般社団法人
白川学園代表理事。1947年、山梨県甲府
市生まれ。早稲田大学社会科学部卒業、大正
大学大学院文学研究科（宗教学）博士課程修了。



和の言霊と結びの働き

「大和魂」は、優しく平和的な側面を表す「和魂（にぎみたま）」というものと合わさった言葉です。これは、日本の古神道にある教え「一霊四魂」や「五霊五魂」にある魂（たま）の中でも、一番大事な「天からいただいた性質を持つ魂」です。

和魂には荒魂の対として、「柔」「温」「熱」「親」「優」の意味があります。また、温やか、賑わう、という言葉が生まれています。この教えが中心となつて、日本人の精神を形成していくんですね。

決して、大和魂というのは、神風のイメージのような勇ましいだけのものではないんです。武士の心得を書いた『葉隠』や真言宗などで説かれる即身成仏などもそうですが、和魂には、身を捨てるつもりで、みんなを助け、豊かに繁栄して欲しいという意味合いもあります。

「伯家神道」とは？

●「神祇伯」とは、天皇と神とを繋ぐ神官職。平安時代中期より明治時代の初期までは「神祇伯」として、白川伯王家は天皇家に重用されたが、その後は在野に下り、家系も断絶した。

●平安時代の中期、顕広王が永萬元（1165年）に「神祇伯」に任ぜられて以降、その子孫によって世襲されるようになった。この家系が「白川家」「伯家」「白川王家」「白川伯王家」と呼ばれている。

●「伯家神道」は、神道という言葉がつくことと、明治以降の教派神道などに大きな影響を与えたことから、神道の一流派と思われがちだが、七沢さんによれば「神祇に特化したノウハウと叡智を集積させた学問一派」と見るほうが、実態に近い理解であるという。

「伯家神道」の五魂とは？

●一般的な神道でいう一霊四魂とは、精魂をのぞく四魂と直霊の一霊を指す。

あらみたま
荒魂／新しいものを生み出す
にぎみたま
和魂／優しく平和的な側面を表す

さきみたま
幸魂／収穫をもたらす働きを表す

くしみたま
奇魂／奇跡のような力を表す

くわしみたま
精魂＊／すべてが統合する働きを表す
＊明治時代以降は「泥魂」

新しい時代・2013年へ

日本人は、そういう思いが非常に強い民族なんです。和の精神がこの国にはごく当たり前に存在し、その要となっていたのが「魂（たま）の結び」という哲学です。

「人と人を結ぶ」「人と自然を結ぶ」「神と人間を結ぶ」。そういう「結びの技」が、日本の精神文化の根底に流れています。

「和」とは精神であり、それを「結ぶ」ことで具体的な形になる——。目に見えない結びの五つの働き「五霊」（※1）によって、神とこの国の人の魂は結びついてきたんです。

古神道の中でも一番の要とされるのが、和の魂。

今、まさに全世界が「和」になって、70億人が同時に共振共鳴するような、より良い社会にしていこう。それが、

新しい時代へ進むための当然の道です。みんながいて、命を大事にしながら共に生きる。それが大切なんです。生存していくというサバイバルの面では、「それができる人たちだけが、再び新しい時代を作る」という考え方もあるようです。

けれど、少なくとも人類70億人のDNAらせん構造は同じで、それが共鳴しあって地球上のすべての生命体を基にした新しい社会になっていく、そのための和のエネルギーの発信源になるのが日本の大事な役割だと私は思うんです。

これから急速に、そういう社会になっていくでしょう。その矢先に、日本が東アジアで混乱を引き起こすような動きをするのは、「和」とは違うでしょう？ 基本の部分から考え直す必要がありますか、と思うんですね。日本も含めた2013年の世界は、

社会全般にわたって経済や政治面で「異様な混乱」が起きるのではないかと思います。

しかしそれは、新しい時代の幕開けのようなもので、「夜明け前が一番暗い」ということなんです。

暗い状態だからといって、心まで暗くなるのではなく、逆に「だから明るくなる」という確信が必要になってきます。この世界は必ず循環しているわけで、命というものの循環は、必ずより良い時が訪れるものです。

横光利一の小説『春は馬車に乗って』ではありますが、いつ死ぬかも知れないようなひどい状態の時でもなお贈られた花束ひとつで心を明るくできる——。

そういう、「にぎにぎしい時代」になるためのベースが、人と人との結び、つまりコミュニケーションにおける「和」にあると思うんですね。

※1／五霊とは



正月3が日の祀り方の作法

正月に祀るのは「時の神様」

お正月には、一般的に「大歳神」と言われる年の神様をお祀りします。

大歳神とは、広い意味では年であり、月であり、狭い意味では日でもある時の神様です。こういう、時間や空間の意味合いがある、抽象的な存在をお祀りするわけです。

時にその神様の名前を、「時置神」と呼びます。

「なぜ、年を祀るの？」と思うでしょうし、概念として分かりにくいかも知れません。これは、なかなか説明しづらいものがあります。

古神道もそうですが、お正月の位置付けというのは、「この世界の起点をいつにおくか？」ということに関係しています。その起点は、古くから太陽や月の運行からなる暦に置かれ、大体的場合、節分で年が変わる旧暦を使ってきました。

長い歴史の中で、暦ののつとること、なぜ大切にされてきたかと言えば、命と関係しています。それは、食物が収穫できる時期や、特定の獲物が捕れる時期を把握できたからです。暦を持つことは、生き延びる鍵を握っていることを意味したんですね。

それもあり、1年の1日目であり、1年の最初にくる月という位置づけから、正月とは「生き延びる意志を確認

するための習わしでもあったんです。

正式なのは天地同大の鏡餅

正月のお供え物は、元々公家の作法から始まりました。その一部のいわれが「昆布は喜ぶ」などと、全国へと伝わっていったようです。

新年を迎える準備として、輪飾りや正月飾りなど、おめでたいものをすべて祀ります。代表的なものとしては、「注連縄」と「輪飾り」です。

輪飾りの「輪」というのは、元々注連縄の意味で、注連縄の省略形が輪飾りには、「葉付きみかん」を使います。飾り付けの日も昔から色々いわれがあり、早い時は12月28日くらいから、大体28日か30日の偶数日で飾ります。例えば、29日は9（苦）があるから飾らない、31日は「一抹飾り」「一夜飾り」と呼ばれ、嫌われてきました。そのため、輪飾りは遅くとも30日までに作って飾ります。

もうひとつ大事なのが、鏡餅です。1年に1回しかお供えしませんけれども、餅の天地（上下）を同じ大きさにして作る「天地同大」が特徴です。

こういう風習は、元々、江戸時代の公家の作法「有職」から伝わったものです。江戸後期くらいから徐々に民間に広がっていき、鏡餅も下のほうだけが大きくなったんです。

3日間お祀りする意味

大歳神を「時」で分けると、日（日の神）と月（月の神）と年（年の神）という3つの柱に対して、この1年があらかじめ良き年になるようにという「予祝」の意味合いを込めて、3日間お祀りします。この間は、遠出しないようにします。

- 1日目／「1年の最初の日」のために祀り、1年の始まりの日を祝う。
- 2日目／「1年の最初の月（正月）」のために祀る。
- 3日目／「1年の12ヵ月（1年間）」のために祀る。

《そのほかの正月行事》

- 野菜や果物、焼いた鯛、昆布やわかめを3日間飾ります。
- お雑煮、お赤飯、なますを3日間毎日作り献饌します。
- 元旦に「初水」と「初火」を取り、太陽に礼拝します。

初水 朝、1年で最初に使う水「初水」を汲みます。その水を献饌や調理に使います。

※現代では水道水を使いますが、昔は井戸水で行いました。

初火 朝、1年で最初に使う火を、昔で言う「ホクチ」（火打ち石）で作ります。それを1日中、灯明とします。

初日 何も特別な儀式は必要なく、日の出の太陽のほうを向いて、手を合わせます。

七沢さんに聞く 古神道からみるお正月Q&A

Q 古神道の見地で、お正月に特別にすべきことはあるのでしょうか？ 例えば、山にこもるとか、滝に打たれるなど、何か特別なことをしたりするのですか？

A 元々、白川家は公家ですから、一部を除いて、野外ではあまり修行しなかったようです。もちろん、苦行はしません。「火の修行」「水の修行」「木の修行」などの、五行の修行というものもありますが、「畳の上でそれを実感する」という方法です。しかも、結界を張った八畳の中を宇宙に見立てて修行します。白川家は本来、古神道の学問所として、あらゆる修行の型を畳の上で実験していたようです。畳の上で、あらゆる神々を体感できるのです。

Q やはり、輪飾りや注連縄を一切しないと、神様に来ていただくことは難しいのでしょうか？ 正月飾りとは、神に感謝を伝える行為なののでしょうか？

A 古神道で言う神様というのは、多くは非人格神であり、自然そのものの働きを神と呼んでいました。ですから、お魚や果物などの食べ物を欲しがることはありません。その意味で正月飾りとは、あくまで人間にとって、神に感謝を伝えるための情緒的な習わしと言えます。

ただし、先祖が神となった「遠津御祖神」の場合、人格神ですから、この場合は「熟饌」と言って、火を通したり、調理したお雑煮やお赤飯をお供えます。

本邦初公開！ 古神道の「器教」に基づいた お正月の飾り方

古神道ファンは
大注目！



ここでご紹介する正月のお供え物は、
一般には知らされていない
伯家神道の祀り方で、
このたび、初めて公開するものです。
飾った姿が美しいだけでなく、
意味を込めて飾り付けを行う、
「器教」という
古神道の「器の教え」に基づき、
それぞれの素材の言霊が象徴する
意味を伝えるものです。
古神道に興味のある方は、この飾り方を
真似ていただいても問題ありません。
(七沢さん)

正月の お供え物と言霊

- 以下を並べた全体が、正月飾りになります。
- このお供えの仕方は、それぞれの素材が象徴する意味だけでなく、「数霊」と「言霊の50音図」という意味から、50神50音の意味も含むなど、二重三重の意味を含んでいます。

お供え	言霊	意味
だいだい ゆずり葉 昆布	代々 譲り よろこぶ	◆ 天地同大の鏡餅の上に、「だいだい」「ゆずり葉」「薄い昆布」を乗せます。家督や代々(だいだい)の伝えを譲り(ゆずり葉)、それを喜ぶ(こんぶ)という意味ですが、私が受け継ぐ伯家神道の場合は、「天地の神々の働きを伝えていく」という意味を持っています。
鏡餅	天地 百道(もち) 言霊百神	◆ 2つとも同じ大きさ「天地同大」の餅を飾ります。「天地という2つの要素から、この世界ができた」という意味があり、本来の鏡餅の原型は、2つとも同じ大きさにするのが原則です。 ◆ また、言霊的には、餅=百道(智)=百神であり、古事記に出てくる天津神の神々、天御中主神(あめのみなかぬしのかみ)から素戔鳴神(すさのおのかみ)までの、百神の働きを祀るという意味があります。
うらじろ	裏白 心も白く清く	◆ 心に裏がないという意味で、古神道の心「平安清明」に通じるものです。 ◆ 以上のお供え物を合計すると「五」になります。数霊的には下記の串柿の「十」と掛け合わせて、「五十」になり、「日本語の五十音を祀る」という意味が秘められています。(三方の端にお供えするのは、田作り=五真米「ごまめ」であり、2重に数霊の「五」を表現しています)。
串柿	夫婦仲睦まじく 数霊：10(2+6+2=10)	◆ 「串柿」は、10個の柿を連結させています。両端の2個と中央の6個が少し離れているのは、夫婦(2、2)仲睦(6つ)まじくという意味です。 ◆ 三方の台の部分に6個が載るようにし、その左右に2つずつはみ出させます。 ◆ これは、十(とお)の理(ことわり)という意味で、十理(とり)と言います。これと五の「五真米」を干し柿の横に置いておきます。これは、50神50音を表します。
勝栗	(武家の時代では)勝つ 数霊：9(10-1=9)	◆ 勝ち栗を三方の左手前の角に載せます。勝ち栗は、武家の作法で「勝つ」という意味。古神道の教えをだんだん武家も取り入れるようになり、「勝ち栗」と言われるようになりました。
かやの実	音図を表す	◆ かやの実を三方の後ろの両角に載せます。かやの木の板は形がゆがみにくく、碁や将棋の盤の目を描くのに最適なため、昔から使われてきました。その木の実を、三方の後ろの2カ所に祀ることは、「言霊を整えて、収める「器」を祀っている」という意味があります。
田作り	ごまめ 五真米 数霊：5	◆ 田作りを三方の右手前の角に載せます。お米を作る時、一番大切なことは田んぼ作りです。「田作り=五真米」なので、数霊で5を意味します。

自らに神を発現させる古神道の奥義

神と一体化する感覚

古神道で言う神とは、主に国津神を指しますが、この神は自然神であり、非人格神のことです。それゆえ、感情に左右される存在ではないわけです。

伯家神道では、ご修行の中で「非人格神と一体化」しますが、そこでは何かの御神示が降ってくるようなことはありません。例えば、時の神様である「時置神」と一体になると、その時に必要な情報が自分の中から、自覚や体感として現れてきます。新しいテクノロジーの発見だったり、起こりうる災害だったり、様々です。

ですからこの状態では、神様からメッセージを受け取るということはないんです。向き合う神様によって、自分の感じ方が変わることもほとんどありません。「時の神様だということだけ、違う神様だということなる」ということはないんですね。

神と一体化した状態であっても、常に自分自身を維持しているわけで、その状態はずっと変わらない。その感覚は特別な境地と思われるかも知れませんが、

んが、そうでもなく、ごく自然に、自分自身から発しているという感覚があるだけです。

発明・発見にも、神様と一体になる感覚が関係しています。「問いかければ、答えが出てくる」という感じですね。私自身が知らないことでも、分かったりしますから。あとで自分が言ったことを聞かされて、「ああ、そうだったんだ」「ああ、すごいことを言っていたんだ……」と思いつながら聞いていたことが、今までにもたくさんあります(笑)。

5次元に送り込む「吹き送り」

神と一体化する神事に関しては、一体化する存在が「どのような神か」を事前に見極めます。

「霊がかり」と「神がかり」は違いますから、例えば、神のふりをする「神ではないもの」も事前に見極めるわけです。

伯家神道では、死霊や生き霊、動物の霊を出現させる行為は、一切行いません。神以外の存在を、神事を行う前にすべて祓います。

伯家神道のご神事は、国家公用のために行いますから、霊的な存在がいるのは問題外です。基本は、その祭祀場をきれいにしておくこと。

人に霊的な問題がある時は、「吹き送り」という方法を行います。それは、問題霊を5次元のパラレルワールドに送り込む手法です。そういう存在には、それ相当の世界があり、古神道でいうところの「根の国」「底の国」のことです。この場合、吹き送りで送り込んだ先で清まることになっています。

タイムトラベルの概念「中今」

私は、「現在の科学の絶対論理に足りないところは何か?」「これから何が必要か?」という部分を見ながら、今という時点に適する科学的な考察をするようにしています。

実は、古神道の哲学にある「中今^{なかついま}」は、時空間を越えるタイムトラベルの哲学なんです。「中今」の概念とは、今という地点に同時に過去と未来がある、ということ。言い方を変えれば、意識レベルのタイムトラベルをトレイニングする機械が、タイムマシンと言えるわけです。

このことは、未来や過去に時を置く「時置神」と関係しています。タイムトラベルをしたい方は、まずは時間を設置するという働きを持つ、この神様をお願いするといいいんじゃないでしょうか(笑)。

もし、タイムトラベルできると、病

病気は、(今生でない)過去に発生していたりします。何代か前の先祖からの遺伝子情報が自分のDNAの中に含まれていて、その影響が現れることがあるんです。

例えば、5代前の先祖が病気をしていたら、その時点で戻って、先祖のDNAレベルから解消すればいい。先祖がその時に体験しているつらい思いを、今という時点で消せばいいんです。現代においては、そのような過去を消すという発想を持たないといけないし、そこに働きかける機械を作らないといけません。そういう共通認識がないと、人類が意識進化に至らないからです。

せっかく科学が進歩したのだから、古神道の「中今」の哲学を役立てられる機械ができないか、という視点で、私は研究を進めてきました。科学性をバランス良く取り入れた機械でトレイニングしていくと、時空間の跳躍も可能になります。それをワープと呼びますが、自分で飛べるようになるんです。

Information



言霊にまつわる意識進化と新時代のシステムについて語られた読み応えのある新刊。

『言霊設計学』
七沢賢治 著
1,890円(税込)/
ヒカルランド

白川伯王家の神祇祭祀文化を学べます

お問い合わせ 白川学園
TEL 03-5919-3419 FAX 03-6380-4778
MAIL info@shirakawagakkan.jp
http://shirakawagakkan.jp/index.php